国際比較調査からみる高齢期の「ゆるやかなつながり」
－ご近所付き合いとインターネットの利用状況から－

ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 主任研究員 工学博士　澤岡　詩野

2011年の3.11東日本大震災は、希薄化していく一方であった人と人のつながりの在り方を見直す大きな転機となったといわれている。特に、地域コミュニティの弱体化が顕著な都市部では、お味噌の貸し借りやご近所同士の助け合いといった「密度の濃いつながり」ではなく、「ゆるやかなつながり」を創り上げる為の様々な取り組みが行われるようになっている。

ここで問題となったのは、多くの人が「密度の濃いつながり」に限界を感じ、「ゆるやかなつながり」を前提にした地域コミュニティを創り上げることの重要性を理解していても、これまで漠然と語られてきた「ゆるやか」の正体が明らかになっていないことであった。

本稿では、著者も企画・分析委員として参画した内閣府「平成27年度 第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」[1)]のデータを用い、日本に較べ個人主義が強く、インターネットの普及著しいアメリカの高齢者（平成26年度65歳以上のインターネット利用率：日本48.4%[2)]、アメリカ60.0%[3)]）との比較を行う事で、現代の日本で求められる「ゆるやかなつながり」を明らかにしていく。

「ゆるやかなつながり」を分析する意味

弱いつながりとも表現されてきた「ゆるやかなつながり」は、これまで、プライバシーを重視する欧米の様な価値観への変化や、インターネットをはじめとする情報通信技術が普及した弊害として、否定的な目でみられることも少なくなかった。

しかし、東京のベッドタウンである杉並区に居住する75歳以上のひとり暮らしを対象に行った調査[4)]では、男性の3割、女性の2割強が「ご近所とのお付き合いは煩わしい」と考えていた。このことは、若年・中年層はもとより、様々なリスクを抱えるひとり暮らしの高齢者も、潜在的なサポート源となりえるご近所に密度の濃いつながりを求めていないとも言い換えられる。

また、情報弱者と位置付けられることの多い後期高齢者、80歳の杉並区民を対象にした調査[5)]では、友人と3割強が携帯電話で通話、1割強がファックスに加え、携帯電話やパソコンから電子メールを送っていた。さらに別の調査では、友人に送られるメールには、直接に会うことで深まる親密さをさらに深める可能性をもつことが示されている[6, 7)]。

ここからは、「第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」から、遠くの家族より近くの頼れる他人として挙げられるご近所とのお付き合いに加え、家族や友人とつながる手段としてのインターネットの利用に焦点を当て、日本とアメリカの高齢者の「ゆるやかなつながり」の実態を分析していく。

高齢者の生活と意識に関する国際比較調査の概要

調査は高齢化問題の基礎調査として、日本と諸外国（アメリカ、ドイツ、スウェーデン）の高齢者の生活意識を比較する為に、内閣府が昭和55年度から5年ごとに行っている。対象は、地域と都市規模から抽出された施設入所者を除く60歳以上の男女で、調査員による個別面接聴取

表１　回答者の属性

	日本	アメリカ
男性	45.6%	48.7%
女性	54.4%	51.3%
平均年齢 (±標準偏差)	71.9(±7.8)	72.3(±8.4)
一人暮らし	15.5%	38.0%**
夫婦のみ	36.5%	38.3%
同居・その他	48.0%	23.7%
健康である	64.8%	67.1%
あまり健康ではない	29.4%	27.4%
病気がちで寝込むことがある	5.1%	5.0%
病気で一日中寝込んでいる	0.7%	0.5%

*$p < .05$　**$p < .01$

で各国 1,000 サンプル回収を原則として実施されている。

本稿では、平成27年10月～12月に行われた第8回の調査から、日本（回収数1,105）とアメリカ（回収数1,003）のデータを用いて分析を行う（表1）。男女比は日本が男性45.6%、女性54.4%、アメリカでは男性48.7%、女性51.3%、平均年齢（±標準偏差）は日本が71.9（±7.8）歳、アメリカでは72.3（±8.4）歳で、いずれも統計的に有意な差は認められなかった。また、健康状態についても有意な差は認められず、日本では64.8%、アメリカでは67.1% が、「健康である」と回答していた。しかし世帯構成については日本とアメリカで有意な差が認められ、日本では一人暮らしが15.5%、同居・その他は48.0% であるのに対し、アメリカでは一人暮らしが38.0%、同居・その他は23.7% であった。

ご近所とのお付き合い

ご近所とのお付き合いについて明らかにするために、「あなたは、ふだん、近所の人とは、どのようなお付き合いをなさっていますか（○はいくつでも）」を尋ねた。

この結果、お付き合いの状況に日本とアメリカで差がみられたのは、「物をあげたりもらったり（＝手段的サポート）」（日本41.9%、アメリカ18.4%）と、「相談したりされたり（= 情緒的サポート）」（日本18.6%、アメリカ28.3%）、軽い形式的なお付き合いである「ちょっとした立ち話をする程度（＝軽いお付き合い）」（日本67.3%、アメリカ45.9%）であった。「お茶や食事を一緒にしている（= 同伴行動）」については差が認められなかった（日本24.2%、アメリカ24.9%）。

また、軽いお付き合いをしている人は、同伴行動も情緒的・手段的サポートのやりとりもしていない傾向が認められた。さらに、同伴行動をしている人はより親密なお付き合いである情緒的サポートや手段的サポートをしており、情緒的サポートのやりとりをしている人は手段的サポートのやり取りをしている傾向がみられた。お付き合いがより親密な内容に展開していくという階層性が示唆される中で、日本においては、軽いお付き合いと手段的サポートの間にそれらの関連がみられなかった（表2-1、2-2）。

表2-1　近隣との関わり方の指標間の相互関連 日本（Spearmanの順位相関係数）

	軽いお付き合い	同伴行動	情緒的サポートの授受	手段的サポートの授受
軽いお付き合い	1.000			
同伴行動	-0.179 **	1.000		
情緒的サポートの授受	-0.159 **	0.296 **	1.000	
手段的サポートの授受	0.036	0.305 **	0.265 **	1.000

*$p < .05$　**$p < .01$

表 2-2　近隣との関わり方の指標間の相互関連 アメリカ（Spearman の順位相関係数）

	軽いお付き合い	同伴行動	情緒的サポートの授受	手段的サポートの授受
軽いお付き合い	1.000			
同伴行動	-0.530 **	1.000		
情緒的サポートの授受	-0.578 **	0.288 **	1.000	
手段的サポートの授受	-0.438 **	0.356 **	0.380 **	1.000

*$p < .05$　**$p < .01$

表3-1　情報通信機器の利用に関する指標間の相互関連 日本（Spearmanの順位相関係数）

	FAX	携帯電話	パソコンからのメール
FAX	1.000		
携帯電話	0.152 **	1.000	
パソコンからのメール	0.252 **	0.184 **	1.000

*p < .05　**p < .01

表3-2　情報通信機器の利用に関する指標間の相互関連 アメリカ（Spearmanの順位相関係数）

	FAX	携帯電話	パソコンからのメール
FAX	1.000		
携帯電話	-0.028	1.000	
パソコンからのメール	-0.100 **	0.141 **	1.000

*p < .05　**p < .01

表 4-1　情報通信機器の利用とご近所とのお付き合いとの関連 日本

		軽いお付き合い	同伴行動	情緒的サポートの授受	手段的サポートの授受
FAX	利用する	71.1%	35.5% **	30.6% **	52.9% **
	利用しない	69.9%	22.8%	17.1%	40.5%
携帯電話	利用する	69.3% *	25.7%	18.9%	42.9%
	利用しない	62.1%	20.3%	17.6%	39.2%
パソコンからのメール	利用する	69.7%	22.7%	21.7%	42.4%
	利用しない	66.8%	24.5%	17.9%	41.8%

*p < .05　**p < .01

表 4-2　情報通信機器の利用とご近所とのお付き合いとの関連 アメリカ

		軽いお付き合い	同伴行動	情緒的サポートの授受	手段的サポートの授受
FAX	利用する	42.9%	33.3%	28.6%	23.8%
	利用しない	45.9%	24.7%	28.3%	18.3%
携帯電話	利用する	46.2%	25.6%	28.3%	19.3%
	利用しない	43.8%	20.3%	28.1%	12.5%
パソコンからのメール	利用する	43.9%	29.5% **	32.1% *	23.2% **
	利用しない	47.1%	22.1%	26.0%	15.5%

*p < .05　**p < .01

つながる手段としてのインターネットの利用

つながる手段としての FAX、携帯電話、パソコンからの電子メールについて、「あなたは、次のような情報機器を使って、家族や友人などと連絡をとったり、情報を探したりしますか。」を尋ねた。

この結果、家族や友人との連絡などの交流手段としてパソコンから電子メールを送っている（日本17.9%、アメリカ38.2%）、Fax を利用している（日本11.0%、アメリカ2.1%）については、両国で大きな差がみられた。一方、携帯電話の利用（日本72.3%、アメリカ87.2%）については、両国で大きな差が認められなかった。

さらに、利用する機器の関連をみると、家族・友人などとの交流手段として Fax を使っている人は携帯電話やパソコンからも連絡を取っており、携帯電話を使っている人はパソコンからも連絡を取っている傾向がみられた。機器がより新しいものの利用に展開していく傾向が認められるなかで、アメリカでは Fax と携帯電話の利用との間に関連がみられなかった（表3-1、3-2）。

ご近所のお付き合いとインターネットの利用

情報通信機器の普及は人のつながりを希薄にした、こんな言葉を耳にすることも少なくない。そこで、ご近所とのお付き合いと交流手段としての情報通信機器の利用との関連をみた（表4-1、4-2）。

日本では、交流手段としての Fax と携帯電話の利用についてご近所とのお付き合いとの関連が認められ、Fax を交

流手段として利用している人の方がご近所と手段的・情緒的サポートの授受や同伴行動をしていた。携帯電話については、利用する人の方がご近所と軽いお付き合いをしている傾向がみられた。

アメリカでは、交流手段としてのパソコンの利用との関連が認められ、家族・友人などとの交流手段として利用している人の方がご近所と手段的・情緒的サポートの授受や同伴行動をしていた。

現代日本の「ゆるやかなつながり」

ご近所と物をあげたりもらったりするお付き合いをしている人が多く見られる一方で、軽い、形式的なお付き合いにとどめる高齢者は、予想に反してアメリカよりも日本で多いことがわかった。同じ地域コミュニティに住むことで生まれる一体感、「地縁」を前提にする日本では、これを基にして行われてきた地域づくりへの反発として、あいさつや立ち話程度の軽いお付き合いを求める高齢者が増えつつあることが考えられる。一方で、夫婦のみや一人暮らしといった高齢者のみの生活、近隣でのお互いの価値観が多様であることを前提にした多民族国家であるアメリカでは、だからこそ敢えてつながらなければいけないという発想から、意識してご近所との接点を持つ高齢者も少なくないことが予測される。

さらに、人とつながる為の交流手段としてパソコンを利用している高齢者はアメリカで多くみられ、利用している人の方がご近所と密接なお付き合いをしていた。ここから日常生活にも浸透しているパソコンをつながる為の補足的な手段として活用している高齢者が多く存在していることが示された。一方、高齢層へのインターネット普及率の低い日本においては、FAX で同様の傾向がみられたものの、交流手段として利用する人が2割弱に留まったパソコンについては、ご近所付き合いとの関連が認められなかった。今後、向老期から職場などで日常的にインターネットを使ってきた団塊世代以降が高齢者となっていくなかで、サークル活動や地域活動の仲間との交流手段としてそれらを活用する人の割合は増加していくことが考えらえる。

近年、アメリカでは、加齢による衰えを補う手段として、発信や交流、買い物などにインターネットを有効活用する「スマートシニア」[注1)]の存在が一般化しつつあることが指摘されている。日本でもタブレットなどの簡易な情報通信機器が普及しつつあるなかで、それらを活用して社会とのつながりを維持する「スマートシニア」も増えつつあることが考えられる。このなかで、最後に残る直接的なつながりである「ご近所」との程よい距離感でのお付き合いを補完する手段としてインターネットを位置付ける視点が、現代日本の地域づくりに求められている。

＜参考文献＞

1）内閣府：平成27年度 第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果（2015）. http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/index.html（2016/9/5）.

2）総務省：平成27年通信利用動向調査：世帯構成員編（2015）. http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001074118&cycode=0（2016/9/5）.

3）Pew Research Center：Digital Divides 2016（2016）. http://www.pewinternet.org/2016/07/14/digital-divides-2016/（2016/9/5）.

4）杉並区：杉並区ひとり暮らし高齢者調査報告書（2009）.

5）杉並区：平成25年度健康長寿モニター事業初年度調査報告書（2013）. http://www.city.suginami.tokyo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/013/777/h25kenko_tyoju_monitor.pdf（2016/9/5）.

6）澤岡詩野, 袖井孝子, 森やす子, 荒井浩道：高齢者の非親族との電子メールを介した交流の特性, 社会情報学, 2（3）, 15-26（2014）.

7）澤岡詩野：都市部の企業退職者の社会活動と社会関係におけるインターネットの位置づけ, 応用老年学, 8（1）, 31－39（2014）.

注1）インターネット先進国のアメリカでは、「日に一度、毎週10時間以上インターネットを使う」、「若い世代よりインターネット通販に積極的である」、「市場で自分の声を積極的に発信する」という特徴をもつ「スマートシニア」が多く存在している。交流手段としての機能に着目した本稿では、「加齢に伴い直接に会うことが難しくなるつながりをインターネットで補完している」を特徴として加えた。

◇PROFILE　**澤岡　詩野**（さわおか・しの）

ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 主任研究員。
東京工業大学大学院卒、工学博士。東京理科大学助手を経て、2007年より現職。研究テーマは高齢期の社会関係。業績として「都市のひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流」（共著『老年社会科学』）、「都市部の企業退職者の社会活動と社会関係におけるインターネットの位置づけ」（単著『老年社会科学』）など多数。